

調査報告

大井八幡大神社のオトウ

三 浦 彩[※]

1. はじめにートウヤ制とオトウの行事

トウヤ制（頭屋制）とは、トウヤやトウモト等と呼ばれる存在を中心として祭祀を行う、中世的要素を備えた祭祀形態のことである。愛媛県内では東予の一部地域にのみ伝承されているが、調査報告は少ない。また、近年のライフスタイルの変化等により、中止や変容を余儀なくされている事例も多い。本稿は、旧態をよく残していると考えられる今治市宮脇に所在する大井八幡大神社のオトウ⁽¹⁾について、令和6年の行事の様子を記録するものである。

トウヤ制において中心となる存在は、地域によってトウヤやトウモト、トウガシラ等と呼び、この言葉がもつ意味合いは多様である。役割に注目すると、神社の祭りや講で様々な雑事を行う当番から、祭事そのものを主宰する特権的な存在まで幅広い。形態も様々で、個人のほか、家や地域で受け持つ場合もある。神社の祭りを実施するための組織であり、中心となる存在を氏子において一年交代の当番制でまわすことを特徴とすると、愛媛県では、主に①芸予諸島地域、②周桑郡地域、③高縄半島先端地域の3地域でのみ伝承されている⁽²⁾。

伝承地のうち、③高縄半島先端地域では、当番制で神社の祭祀を執り行う組織及び執り行う行事をさしてオトウと呼ぶ。オトウの中心となる者はトウヤやトウモトと呼ばれ、これに選ばれることを「オトウが当たる」や「オトウを受ける」という。また、氏神のオトウをオオトウと呼び、それ以外は単にオトウと呼ぶか、コトウや〇〇神社のオトウといって、氏神のオトウと呼び分ける。別名オトウ地域とも呼ばれる地域である。

オトウ地域の特徴としては、トウワタシが挙げられる。トウワタシは、トウヤ・トウモトの交代の儀式で、県内のトウヤ制が伝承される地域のうち、③高縄半島先端地域でのみ行われている儀式である。

本稿で報告する大井八幡大神社のオトウは、トウワタシを行うオトウ地域に属する。まず大井八幡大神社の氏子域と、そこでの複層的なオトウの行事について述べた後、大井八幡大神社のオトウについて、時系列に沿いながら報告する。

2. 大井八幡大神社の氏子域とその様相

大井八幡大神社の所在する今治市大西町は、高縄半島北西部の瀬戸内海沿岸部に位置する。世帯数は3,924世帯で、人口は7,789人である⁽³⁾。沿岸部には新来島どつくなどの造船所があるが、内陸には田畑が広がる。

大井八幡大神社の氏子域は、宮脇、大井浜、新町の3部落である（図1）。この地域には、大井八幡大神社を含む大小の神社があり、それぞれでオトウが行われている。

宮脇は、3部落のうち内陸に位置する部落である。住民には農家が多い。大井八幡大神社の所在する部落であり、他に客大神社、諏訪大明神社、山神社がある。これらの神社のオトウは「オオオトウ（大御頭）」と呼ばれている。同部落には、上森神社、下森神社、平野神社、貴布祢神社、鎮守神社などの小宮もあり、それぞれにオトウがある。

大井浜は沿岸部の部落で、造船所があるのはこの部落である。大井浜では、正八幡神社でオトウを行っている。大井八幡大神社が、もとは大井宮と呼ばれた宮であり、正八幡神社にいた八幡神を合祀した経緯があるためである。

新町は、上（かみ）、下（しも）、駅前、東の4つの地域に分かれ、それぞれに八幡神社がありオトウ

を行っている。新町の八幡神社の社は、持ち運びのできる小さなもので、現在は大井八幡大神社へこの社を持って来てオトウをしている。八幡神社のほか、氏神である荒神社や、山神社、巖島神社、野間神社などの社もあるが、現在はすべての社をまとめて一回のみ行事を行っている。

このように、大井八幡大神社の氏子域においては、本社のほか、各地にある小宮にもオトウがあり、複層的な様相を示している。氏子域のうち、大井八幡大神社のある宮脇部落について以下に述べた後、大井八幡大神社のオトウについて詳しくみていく。

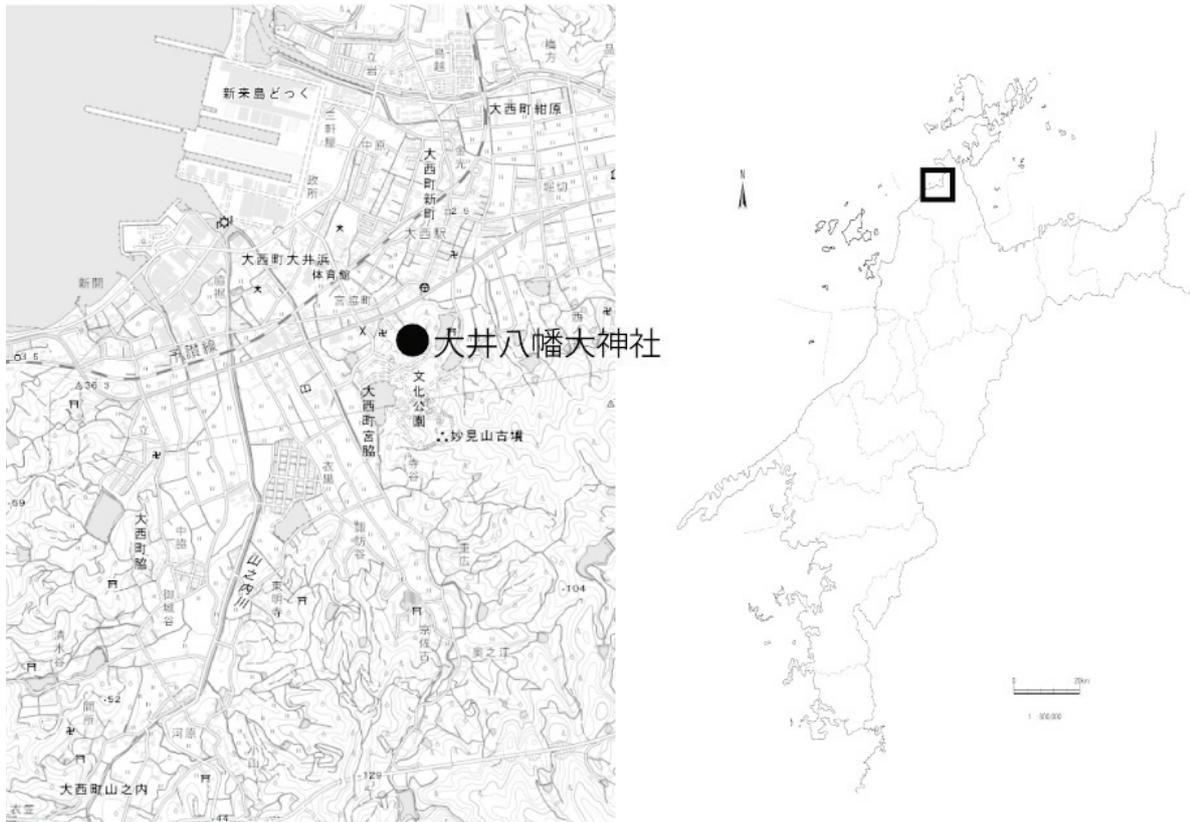


図1 大井八幡大神社位置図

3. 宮脇部落のオトウ

行事のことをオトウあるいは「オトウの神事」といい、中心となる者を「オトウモト（御頭元）」と呼ぶ。オトウモトになることを「オトウを受ける」という。各オトウには、歴代のオトウモトの名前を記した御頭文が伝承されている。

先に述べたように、宮脇部落の神社のうち、大井八幡大神社、客大神社、諏訪大明神社、山神社のオトウはオオオトウと呼ばれている。オオオトウのうち、個人でオトウを受けているのは大井八幡大神社のみである。そのほかの3つの神社では、ガワ（側）と呼ばれる、10～15軒の家からなる小組合で受ける「ガワマワシ」としている。ガワマワシの場合、オトウモトは小組合長が務める。ガワマワシは、オトウを受けるガワの順番が決まっており、客大神社、諏訪大明神社、山神社の3つの神社のオトウを回し受けていく。3つの神社の中に個人でオトウを受けたい人がいた年は、その神社のオトウはガワマワシからは飛ばして回す。いつからガワマワシになったかは聞き取りできなかったが、元は個人でオトウを受けていたところが、個人では受けられなくなりガワマワシをするようになったという。

4. 大井八幡大神社のオトウ

大井八幡大神社のオトウに参加するのは、宮脇部落の氏子である。



写真1 大井八幡大神社社殿

4-1. 大井八幡御頭文

オトウはいつから開始されたか定かではないが、神社に伝承されている大井八幡御頭文（写真2）には、文化元年八月の年号が記されているため、江戸時代より続く行事とされている。



写真2 御頭箱外袋（左） 御頭文（中央） 御頭箱（右）

大井八幡御頭文は、代々のオトウモトの名簿である。和紙の帳面で、表には「文化元子歳 大井八幡宮御頭文 八月」と筆書きされている。帳面には、「一 文化十一年 与六」というように、年と、オトウモトの名前が並んでいる。御頭文の初めのほうは異なる名前が同じ筆跡で書いてあり、オトウモトも苗字がなく名前だけであることから、氏子においては、オトウモトは庶民であり、字を書くことのできる者が代筆していた証であると解釈されている。なお近年は、オトウモトの名前だけでなく、その年に起こった主な出来事も記すようにしているという。例えば令和元年には、「天皇の代替わりに伴い平成は四月三十日まで 五月一日より令和の時代を迎える 令和元年五月十七日」と記されている。

御頭文を納めた御頭箱は、木製の箱で、蓋に「大井社御頭組」と筆書きされている。御頭箱は、オトウモトが自宅の神棚において一年間管理する。御頭箱は非常に大切にされており、もし火事になった場合は、なによりも先に持って逃げるといふ。近年、箱が古びてきたので布製の外袋が作成されている。外袋には、「大井八幡大神社 御頭箱入」と記されている。

4-2. オトウモトの役割

大井八幡大神社では、オトウモトは個人で受けている。ヨリトウ等、オトウモトを補佐する役は設けず、オトウモトは自分のガワの人たちに手伝ってもらい仕事を行う。オトウモトの仕事は1年間の宮守であったが、現在はオトウに関してのみ、お供え物の準備、注連縄の準備、巫女への心付けの準備、行事前の境内の掃除等を行う。オトウモトにはブク（不幸ごと）があつてはならないため、病気にならないよう体調管理をするなど気をつけるという。

個人でオトウモトになる場合、ひとつの神社のオトウは一度しか受けられない。厄年に当たる人が「八幡さんのオトウを受けとかないかん」といって名乗り出たり、周りの人に勧められたりして受ける。オトウを受けることは一人前の証であり、以前は「オトウを受けるまで元気でおるかな」といっていたほど、何年も先まで次のオトウモトが決まっていたという。また、旧家では、代々オトウを受ける家もあった。現在の氏子の中にも、神社に伝承される御頭文に曾祖父から4代続けて名前が記されている人がある。

4-3. オトウカグラ

大井八幡大神社では、オトウモトの交代の儀式であるオトウワタシの際、御重箱に入れた蒲鉾を新旧のオトウモトと宮司で交互に食べる。オトウワタシ終了後は、オトウモトから参列者へと渡され、参列者も一口ずつ食べる。このオトウワタシやその後の直会で回し食べられるもの、また食べる行為のことを「オトウカグラ（御頭神楽）」と呼ぶ。「みつもの（三つ物）」といい、現在は蒲鉾やちくわなど3種類のものを一口サイズに切ったものであるが、本来は新しいオトウモト（以下、新オトウモト）から現在のオトウモト（以下、旧オトウモト）へ送る米1升、酒1升、鯛2枚のことであった。オトウモトは供物から直会の準備まで負担が多かったため、次のオトウモトが供物の一部を肩代わりする意味合いがあつたのではないかという。別名オクリトウともいう。

4-4. 開催日

オトウは、例大祭の前日に行う。以前は、5月19日が例祭（お宮出し）で、前日18日の朝6時にオトウを行い、夕方に例大祭をしていた。20日には別のオトウがあつたので、大井八幡大神社のオトウを鎬矢に、18日から20日までの3日間祭りが続いていた。今治市に合併され、例祭が5月第3土曜日となり、オトウのみ前日の第3金曜日に行うようになったが、今でもオトウは祭りのスタートだという認識があるという。近年できた習慣では、オトウの際、拝殿の最前列に宮脇獅子連の会長と、やぐら保存会の会長が座ることになっている。

4-5. 実施内容

令和6年は、5月17日金曜日に実施された。実施内容は以下の通りである。

5：20頃 準備

参加者が集まり始め、準備を行う。新旧のオトウモト、氏子総代、部落総代は黒スーツに白ネクタイの正装である。巫女の保護者（母親）もフォーマルを着用。そのほかの参加者は普段着である。参加者はオトウモトへ「今日はおめでとうございます」とあいさつする。

神殿には供物が供えられる。供物は三宝に入れ、2段に分けて並べられる（写真3）。上段は前後に2列ある。供物は神殿に向かって左より以下のとおりである。



写真3 祭壇前の供物

上段後列：イカ、重ね餅、玄米、白米、御神酒2、タイ・エビ
上段前列：塩、ニンジン・ジャガイモ・ソラマメ、ワカメ・ヒジキ・シイタケ（乾物）、キャベツ・トマト、
リンゴ
下段：お札、お守り、御重箱（オトウカグラ）、紙コップ

5：40 巫女の挨拶

巫女が神前に礼をしたあと、オトウモトへ「おめでとうございます」と挨拶する（写真4）。オトウモトは巫女へ心付けを渡す。巫女は、小学校5・6年生の4名が務める。巫女の選出は子どもの親にゆだねており、神社は舞の稽古にのみ関わる。現在のところ、巫女は主に母親の口コミによって継承されている。

神前に向かって左側に神職、巫女、右側にオトウモト、氏子総代、部落総代が着座する（写真5）。参列者は拝殿に並ぶ。



写真4 オトウモトに挨拶をする巫女



写真5 中殿に着座するオトウモトと総代

5:55 オトウモトの挨拶

オトウモトより参加者へ挨拶。「コロナも終わったので、御神酒・お札を配るまでおってほしい」との呼びかけがある。

6:00 オトウの神事開始

開式太鼓

6:04 修祓

神職→巫女→オトウモト→参加者の順に行う。

6:11 開扉、献饌

神職が「お～」と声を出しながら本殿の戸を開ける。この間、参加者は頭を下げている。

6:14 宮司祝詞

6:21 神楽・浦安の舞奉納

4人の巫女が中殿で扇、剣鈴を持ち舞う（写真6）。舞が終わると巫女は登校のため帰る。



写真6 舞を奉納する巫女

6:34 金幣拝戴

神職が金幣を持ち、上下に3回揺らす。祭壇前、供物の上で揺らした後、オトウモトの頭上で揺らし3回背中に当てる（写真7）。次いで氏子総代、部落総代、参列者と同様に行う（写真8）。



写真7 オトウモトに金幣拝戴する



写真8 参列者に金幣拝戴する

6:46 玉串奉奠

オトウモト→氏子総代→部落総代の順に拝礼。

6:49 撤饌・閉扉

閉式太鼓

7:00 オトウの神事終了・御神酒（ごしんしゅ）拝戴

御神酒が参列者へ配られる。この後、オトウワタシまで直会が行われる（写真9・10）。直会に参加しない人は、先にお札（オカグラ）をいただき帰る。直会の食事は、各自で弁当を持参する。瓶ビールが準備されており配られていた。なお、オトウモト、総代、神職は中殿脇の机で仕出し弁当を食べる。仕出し弁当は、オトウモトが準備したものである。



写真9 直会

現在は直会に参加せず帰る人もいるが、以前は楽しみのひとつで盛り上がっていたという。お宮は部落の中心であり、オトウの神事後の直会は、部落のはかりごとを決める場でもあった。直会で決めたことは、「神さんの前で決めたことだから変えない」という。



写真10 直会をするオトウモトと総代

8:00 オトウワタシ

拝殿には16人の参列者がいた。宮司祝詞（写真11）の後、オトウワタシが行われる。



写真11 オトウの神事

中殿の中ほどに座卓を置き、その上に供物より御重箱（オトウカグラ）、御神酒、紙コップの載った3つの三宝を並べる。コロナ前は紙コップではなく、かわらけを使っていた。御重箱の中には蒲鉾が入っている。神殿に向かい、右に旧オトウモト、左に新オトウモトが並んで座る。座卓を挟んで向かいには宮司が座る。

宮司より旧オトウモトへ御神酒をつぎ、旧オトウモトがいただく。次いで宮司が御重箱を差し出し、旧オトウモトは箸でつかんで一口いただく。

宮司より、新オトウモトへ同様に行く（写真12）。終わると、旧オトウモトより宮司に対して同様に行く（写真13・14）。



写真12 宮司から新オトウモトへ御神酒をつぐ



写真13 旧オトウモトから宮司へ御神酒をつぐ



写真14 オトウカグラをいただく宮司

宮司が新オトウモトへ御頭箱をわたす（写真15）。御頭箱には、歴代のオトウモトの名前を記した御頭文が入っている。



写真15 宮司から御頭箱を受け取る新オトウモト

新オトウモトへ御頭箱が渡されると、参列者全員で合わせて二礼二拍一礼し、オトウワタシは終了する。

オトウワタシの後、新旧のオトウモトは拜殿へ行きあいさつをして回る。参列者一人一人に対して、旧オトウモトが御重箱を差し出し「お世話になりました」、新オトウモトが御神酒を差し出し「今年もよろしくお願いします」と言葉を交わす。参列者は御重箱より蒲鉾をいただき、御神酒を飲む（写真16）。その後は、片付けをし、散会となる。



写真16 挨拶をする新旧のオトウモト

4-6. 小結：大井八幡大神社のオトウ

ここまでみてきたように、大井八幡大神社のオトウは、行事をオトウと呼ぶ点、神社によってオオオトウと呼び分ける点、主となる存在をオトウモトとする点、オトウワタシに重きを置く点において、高縄半島先端地域の典型的なオトウといえることができる。一方で、ガワという地域の単位が行事においても機能しており、オトウモトを補佐する役割や、オトウの役割そのものを担っていることには、この地域の特性が表れているといえるだろう。

5. おわりに

愛媛県では、愛媛県教育委員会が主体となり、令和3年度から令和5年度にかけて全県的な祭り・行事の調査が行われ、令和6年3月に『愛媛県の祭り・行事-愛媛県祭り・行事調査報告書-』が刊行された。この報告書をみると、掲載されている祭り・行事の多くが、地域で行われている小さな祭りや行事であることがわかる。豪華な山車や練りが出たり、多くの人が参加したりと、華やかな祭礼に目が向きがちであるが、地域の人々によって脈々と受け継がれてきたたくさんの小さな祭り・行事こそが、愛媛県の文化を形作っているといえるだろう。

今回調査した大井八幡大神社のオトウも、氏子のみが参加する行事である。行事を通して、地域の人々のつながりや、御頭文に見られるような江戸時代から続く地域の歴史、ガワマワシに見られる行事を続けていく知恵など、大井八幡大神社を中心とした地域史とでもいえるべきものが垣間見えた。また一方で、行事の継続は、様々な苦勞、多くの思いがあって成しえている。この調査報告が、地域の小さな祭り・行事の存在や、その継続にかける人々の思いへ目を向ける機会となれば幸いである。

※愛媛県歴史文化博物館 学芸員

謝辞

調査にあたり、大井八幡大神社禰宜櫛部浄之氏にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

注

- (1) 愛媛県教育委員会2024『愛媛県の祭り・行事－愛媛県祭り・行事調査報告書－』pp.199においては、「お頭さん」と報告されている。
- (2) トウヤ制については、以下の文献が詳しい。愛媛県史編さん委員会1983『愛媛県史 民俗 上』pp.677-719、愛媛県教育委員会2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書 民俗編』pp.83-96、愛媛県教育委員会2024『愛媛県の祭り・行事－愛媛県祭り・行事調査報告書－』pp.10-11
- (3) 令和5年度今治市住民基本台帳人口統計（今治市Webページ 今治市の住民基本台帳人口統計 https://www.city.imabari.ehime.jp/opendata/toukei_jinkou/ 2024.08.17閲覧）より記載。令和6年3月31日時点の人口である。

挿図出典

図1 国土地理院地図を元に三浦作成

写真1・2、4～7、9～11 三浦撮影

写真3、8、12～16 松井寿（愛媛県歴史文化博物館専門学芸員）撮影